

おもちゃ箱 4

四条通りの時計塔

樋口 穰



休日の昼下がりなど、本を読みふけていると、辺りが暗くなりかけているのにも気付かないことがあります。遠くから寺の時鐘が聞こえてきて、ようやく日が暮れかかっている現実に戻されます。晩鐘を「本のとも」として、と言うと聞こえはいいですが。

時鐘が全国に普及する以前、庶民にとって時を知るのは簡単ではなかったでしょう。当館所蔵の貴重書の中に、小川友忠という出雲藩士/蘭学者が著した西洋時計活用マニュアル『西洋時辰儀定刻活測』（天保9年・1838年刊）があります。日本各地ごとの太陽の高度や、明るさ、星の見え方などを手掛かりに時刻を知る方法も紹介していますが、曇天雨天、月が明るい夜にはそれもむづかしいというようなことが書いてあります。

実は時の鐘は江戸時代に制度化され「城の鐘」「寺の鐘」「町の鐘」というふうに、責任分担が定められました。それぞれの時報がどのように行われ、それがどうやって江戸から全国に普及したかという話はとても魅力的で面白く、日本人と時間との関係について示唆する情報も多いのですが、ここでは涙を吞んで割愛します。ただ、中央の時報システムが全国に行き渡っていた国は、同時代の世界では稀だったことは確かです。江戸市中9箇所にあった町の鐘もそのほとんどが消えてしまいました。東京地下鉄小伝馬町駅近

くにある十思公園に、宝永8（1711）年鑄造の「石町時の鐘」がただひとつ遺っていることだけ記しておきましょう。

時を管理する、というのは、統治者にとって権威を裏付け、補強するものでした。古く中国には機械仕掛けの漏刻が存在しましたし、日本の古代王朝でもそれを何とか導入定着させようとした事がありました。アニメ「ルパン三世/カリオストロの城」（1979年劇場公開）では、公国の富と権威の象徴として時計台が印象的に使われます。ヨーロッパの古い町々の城門や広場付近には町の象徴としておおきな時計や凝ったカラクリ時計があって、今も大切に管理されているものがあります。統治者が時を管理し、それにしたがって日常を送る住民、という図式がそこにはあったのです。

つまり、権威の象徴として、時の支配は重要なものだったのです。

日本に話をもどすと、時代が明治に入ってもなお、その初期には時報と権威とは濃い関係にあったと思われます。例えば、京都では町組が設立する小学校にはほぼ必ず太鼓楼があって、周辺地域への時報を担当していました。Web版「図書館長のおもちゃ箱/四条通今昔散歩（第2回）」でも祇園町の小学校の太鼓楼について触れました。初期の京都の小学校は民間が出資して設立したものではありません

が、やはり教育機関が時報を担っていたという段階では小
学校の権威の象徴としての意味もあったことでしょう。

明治も時代が進み、写真絵葉書が登場し普及する頃、四
条通りには必ずと言ってよいほど登場する時計塔がありま
した。高層建築が少なかった街並の中では、背の高い時計
塔はかなり目立つランドマークになります。それらの中か
ら、2種類の時計塔を写した絵葉書を紹介します。

冒頭の写真は、鉄筋コンクリート造り、優雅なアーチ橋
として架け替え完成直後の四条大橋を東南から西向きに撮
影した絵葉書です。大正2年頃でしょうか。加茂川対岸、
橋を渡ったところには四条小橋があるのですが、その手前
北側角にあったのが村田時計店で、その時計塔が絵葉書の
中にしっかりと姿を留めています。



〔写真1〕「京都四條磧納涼」

〔写真1〕「京都四條磧納涼」は、ひしめく如くに設えた
川床の灯火が水面に映り込む夕暮れの情景を写した絵葉書
です。近景にははっきり写っている木造橋は通称竹村屋橋と
いう、私設の橋です。四条大橋のひとつ川上にあったこの
橋は、今は存在しませんが、兩岸には当時の橋の基が遺っ
ています。また、人の集まるところには必ずと言ってよい
ほど掲げられた仁丹の電照大看板も見えています。余りに
大きいのであちこちで景観問題になったほどです。この写
真でも、村田時計店の時計塔はくっきりと夕空に浮かび上
がっていますね。

〔写真2〕「(京都) 四條通り」は京都四条御旅町(寺町
四条) 附近を東向きに撮影したものです。「京都四條磧納
涼」の10年ほど後の光景と思われます。四条通り南側に
家邊徳時計四条店の時計塔が見えています。その隣に祇園
まつりの鉾を模した建築が建つまでは、遠くからもよく見
えたことでしょう。この時期の御旅町を写した絵葉書には
定番として登場するアイテムです。家邊徳時計店と言えば、
三条富小路東南側に明治4(1871)年、家邊徳之助(初
代)によって建てられた家邊徳時計店本店が京都でもっと



〔写真2〕「(京都) 四條通り」

も古い時計塔建築だったと思われます。最初の建築は京町
家の大屋根の上に載せたような時計塔でした。その後明治
23(1890)年に煉瓦造りの洋風建築として増築され、そ
の際にも改築された立派な時計塔は今は喪われましたが、
建物は現在も同位置にあり、国登録有形文化財に指定され
ています。四条店のほうの時計塔建築は、昭和大恐慌のこ
ろ人手に渡り、遺っていないのは残念です。

このほかにも京都市内にはいくつもの時計塔建築があり
ました。学校を除けばそれらはほとんどが時計店の塔でし
た。ですから、この種の時計塔を看板建築の延長として捉
えることもできるでしょう。しかし、私はちょっと違った
意味づけを考えています。

時の秩序が権力者の支配にあった段階から、大衆の日常
へと移行しはじめるプロセスをそこに読み取れるのではな
いかと思うのです。それは統治者の権威を示すものではな
く、地域や町の象徴としての存在でもありました(時代は
降りますが、映画「ゴジラ」(1954)で、銀座四丁目の
服部時計店時計台が破壊されるシーンは、東京の人にとっ
てはその意味でも喪失感を与える効果があったことでは
しょう。余りに衝撃的だったため服部時計店から東宝映画会
社に自社ビルを写すなと言う抗議があったという話も伝えら
れています)。

やがて時計は柱時計、懐中時計、腕時計と、個人の持ち
物として普及して行きます。そして現在、時間は完全に個
人管理のものとなったようです。

京都市内あちこちにあらわれた時計塔建築は、近代大衆
文化がこれから花開いて行こうとする時代の、まさに象徴
的な建築だったと言えるのではないのでしょうか。

ひぐち じょう(教授・日本文化史)

本学所蔵関連図書

- ①小川友忠『西洋時辰儀定刻活測』, 1838
- ②丸山宏, 伊從勉, 高木博志編『みやこの近代』 思文閣出版, 2008
- ③角山榮『時計の社会史』 吉川弘文館, 2014